

# めだか大学通信 19号

2013年11月3日 岡田京子

すっかり秋となりましたね。10月6日は、たつの素子さんの告別式がありました。「つくり小屋」例会の当日となり、午前の式に参加した人も行けなかった人も、改めてみんなで素子さんを偲び、小須田さんが差し入れてくれたお酒でいろいろと思い出を話しあいました。告知を受けてからの1年と3ヶ月、変わらぬ明るさで、自分の仕事を力一杯続け、「もう思い残すことはない」と言って逝ったのでした。

これまで私たちは「生命記憶」や「限界芸術」という言葉と、その意味を学ぶことによって、自分たちの生き方・存在の仕方を改めて見出してきました。そして今また素子さんによって、私は、人間は「死に方」、いや「死に至るまでの生き方」を自分で選択できることを知りました。そしてまたこれは「生命記憶」につながっていることも。またみんなでいろいろ話し合ってみたいと思っています。

10月6日のつくり小屋は、素子さんだけでなく、

つい一週間前に、とつぜんご主人を亡くした小関玲子さんに（お葬式に「つくり小屋」から8人が参加しました）ご主人のことを話していただく日にもなりました。そして小関さんの作品の中から『穂高』をみんなで歌いました。

久し振りの参加だった細田さんに、みんなが好きな『富士見橋』を歌ってもらって、みんなも歌いました。

北海道に行った村上さんが久し振りに帰って来て（？）参加してくれました。例のファリヨンさんのアリランの替え歌で、北海道で始めた畑の歌を歌ってくれました。

今井さんは『俺ら』という新しい作品を作ってきました。一人の労働者が何気なく「俺ら」といった言葉に、今は失われたと思われている響きを聞いて感動した気持ちを書いたものです。みんなからも共感の声があがりました。

稲川さんは、「カイジュウ」というあだ名がある孫を歌った『ヤダヤダマン』という新曲です。みんなで大笑いしながら歌いました。こんなひょうきんな歌もたくさんできるといいですね。

千賀子さんはいつもながら、新潟から東京に帰ってきたその足での参加です。

『ねむの花』をうたった、千賀子さんらしさ一杯の歌ですが、まだ未完で、みんな

であれこれ考えたりして、11月に持ち越すことになりました。

終わって、この石神井公園の駅周辺に、にわかには出来た街の中の珈琲やさんで、みんなでおしゃべりをして帰りました。こういうリラックスした場だから語れる、と言う話もありますので、稲川さんからのお知らせも入っていると思いますが、「うた小屋」の付属版として恒例にしませんか。...と言うわけで、実り多い10月の例会でした。

9日は「にんじん畑」でした。やはり、たつのさんの思い出がたくさん語られました。児童館の仕事の中で、たつさんと親交があった人たちが多かった「にんじん畑」です。告別式で歌われた遺書のような詞に安達さんが作曲した『ふたたび』を歌いたいという希望でしたので、安達さんから楽譜をもらってみんなで歌いました。悲しく美しい歌です。それから今進行中の歌をそれぞれ出しました。

増田さんは『遠い思い出』、学校に入った頃の思い出で、4番まで書き足してできあがりです。何気ないフシですが歌うとしみじみとした気持ちが広がる、やっぱり日本人の気持なんだなあと思います。

ミヨちゃんは石井彰さんの『夏休みももうすぐ終わるね』に曲付けしています。ミヨちゃんの今までの曲とはひと味違った日本的な線の強いものになっています。楽譜を整理して、11月にもう一度、です。

上原さんと名取さんは、今年の冬に一緒に旅をした岩手の「雪あかり」の祭りの様子を、短い幾つかのフシを繰り返していくやり方で作った「物語の歌」です。この手法ならではの日本の情景が巧まず表現されていきます。皆さんも一度試されることをおすすめします。

私岡田は、下地禎子さんの詞で、『わたしたちの福島』という歌を作りました。下地さんが、福島の小・中・高の子どもたちが書いた作文をもとにして書いたものです。時間があったら皆さんにも歌ってほしいと思っています。「原発」に関する歌がほしいと思います。私たち自身のためにも。皆さんも少しずつ考えて行きませんか。(11/1)